



令和四年度筑波大学附属図書館特別展

孔子を まつる

歴聖大儒像の世界

令和四年度筑波大学附属図書館特別展
創基一五一年筑波大学開学五〇周年記念特別展

孔子を まづる

歴聖大儒像の世界

令和4年11月1日(火)—11月18日(金)
筑波大学附属図書館
(中央図書館貴重書展示室)
主催：筑波大学附属図書館 / 筑波大学芸術系

凡 例

1. 本書は「令和4年度筑波大学附属図書館特別展 孔子をまつる ー歴聖大儒像の世界ー」(会期：令和4年11月1日(火)～11月18日(金))の図録である。同特別展は、創基151年筑波大学開学50周年記念冠事業として開催される。
2. 本図録に掲載されている資料は、特に記載のない限り筑波大学附属図書館が所蔵する。なお、資料番号1～5・12・13については、東京国立博物館からの借用資料である。
3. 本書の図版番号は、展示資料の番号と一致するが、展示の順序は必ずしも一致しない。また、一部の展示資料については、本図録への掲載を割愛する。
4. 掲載資料の表題等の書誌情報や解題等の漢字表記は、原則として通行の字体に改めた。
5. 本書は以下の分担で執筆し、編集および校正については特別展ワーキンググループが行った。
 - ・水野裕史(芸術系助教) プロローグ・第1章～第3章・エピローグ概説/資料解説12・13・16～20/コラム「馬麟「道統五像」と「歴聖大儒像」/「嘉納治五郎と東京帝室博物館」
 - ・谷口孝介(人文社会系教授) コラム「17世紀文化人ネットワークのあかしー「歴聖大儒像」の価値ー」/画賛訓読
 - ・山澤学(人文社会系准教授) 第4章概説/資料解説14・21～24/コラム「寛永13年朝鮮通信使副使金世濂とその交流」
 - ・東瑞穂(芸術学学位プログラム大学院生) 資料解説1～11・15/関連年表
 - ・吉沼美咲(芸術学学位プログラム大学院生) コラム「狩野山雪と粉本」/関連年表
 - ・大久保明美(学術情報部情報企画課) 狩野山雪「歴聖大儒像」の修復
6. 本展覧会は、科学研究費補助金基盤研究(B)「「儒教美術史」構築のための発展的研究ー東アジア文化圏の構造解釈と研究資源化」(19H01211)による研究成果の一部である。
7. 表紙画像は狩野山雪「歴聖大儒像」のうち孔子像(東京国立博物館所蔵)であり、ColBase (https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/H-1342-11) を加工して作成した。

目次

附属図書館長ご挨拶	 2
芸術系長ご挨拶	 3
プロローグ 孔子をまつる	 4
第1章 狩野山雪「歴聖大儒像」	 8
第2章 釈奠器	19
第3章 歴聖大儒像への道	22
第4章 歴聖大儒像の評価	28
エピローグ 東京高等師範学校と釈奠	32
関連年表	35
参考文献	36
掲載資料	37

附属図書館長ご挨拶

筑波大学附属図書館では平成7年度の中央図書館新館竣工時に貴重書展示室が設置されて以降、学内各組織の協力を得つつ、本学開学以来所蔵する貴重な資料を広く公開する展示事業を行ってきました。

昨年度は人文社会系との共催で「令和3年度筑波大学附属図書館特別展 時を数む一紀年・暦法・元号」と題し、古来より時間を数え記録し続けてきた人間の営為と、それが与えた政治的、社会的、文化的な影響を読み解く展示を行いました。新型コロナウイルス感染症対策として学内者限定ではありましたが、会期中903名にご観覧いただきました。

また今春5月16日から5月27日まで、中央図書館において「歴聖大儒像 儒者のまなざし」展を開催しました。令和元年度から令和3年度にかけて解体修理を行った「歴聖大儒像」の修復完成記念として特別公開したものです。展示では、修復工程をパネルや大型ディスプレイで展示し、現在の古美術修復技術と修復された山雪の名画を堪能することができました。また、本作品の修復担当者による保存修理研修会も開催し、職員の学びを深める機会となりました。本展示も学内者限定の観覧となりましたが、10日間の会期中に700名を超える参加者があり、修復への関心の高さを窺い知ることができました。

今回の展示は附属図書館と本学芸術系の共催により開催します。令和5(2023)年、筑波大学は創基151年、開学50周年を迎えます。今より150年前の明治5(1872)年、東京の湯島聖堂内に師範学校が設立され、その流れは筑波大学に受け継がれています。そのことにちなみ、湯島聖堂で催された孔子を祀る祭典「釈奠」で用いられた美術資料を展示します。本学が所蔵する「歴聖大儒像」は、林羅山の依頼により、狩野山雪が寛永9(1632)年に21幅制作したうちの6幅です。残り15幅は東京国立博物館に伝わっています。今回は東京国立博物館に伝わった孔子像や釈奠器などの関連資料を借用し、併せて展示いたします。長い年月を経ての再びの邂逅ですので、本展はそれを観覧できる貴重な機会となるはずです。

附属図書館特別展は、本学に蓄積された豊かな「知」を積極的に内外に向けて発信するという附属図書館の取り組みの一つであります。本展では貴重な資料の展示だけでなく、中央図書館での特別講演会、オンラインでのシンポジウムも行います。また、特別展オフィシャルWebサイトから電子展示の公開も行う充実した内容となっております。ぜひご高覧いただき、新たな世界を発見される機会としていただくことを期待いたします。

令和4年11月

附属図書館長 池田潤

芸術系長ご挨拶

このたび、附属図書館と芸術系の共催により、特別展として、「孔子をまつるー歴聖大儒像の世界ー」が開催されることになりました。儒教の祖である孔子は、紀元前6世紀に中国山東省で生まれ、その教えは、広く東アジアに波及し、各地で孔子がまつられました。本展では、本学と東京国立博物館が所蔵する「歴聖大儒像」を中心に、孔子祭典を飾った文物や関連する資料を展示します。

筑波大学芸術系は、前身である東京教育大学教育学部芸術学科や1975年に設置された筑波大学芸術学系ならびに2004年の法人化以降に大学院人間総合科学研究科に教員が所属した時期の芸術学専攻によって形成された歴史を踏まえつつ、2011年10月に発足した教員組織です。日本の芸術文化環境および研究開発の創造的振興に寄与することを目標とし、芸術学、美術、構成、デザイン、世界遺産学等の理論から作品制作・実践を含む多彩な専門分野の教育研究を進めています。

この展覧会は、2000年から芸術系の教員が中心となって研究を進めている儒教美術に関する研究成果の一部です。これまで学内外で7回の展覧会を開催し、今回で8回目となります。研究の過程で、孔子祭の舞台となった湯島聖堂にかけられた扁額の模本が本学に伝来していることが明らかとなりました。そして、復元研究が進められ、扁額と関東大震災で失われた孔子像の研究が始まり、今に至ります。

近年、孔子の教えが見直されています。その教えの核の一つとなる「中庸」は、道徳的な行動の基準を具体的に示すものとして、広く知られてきました。中庸とは、過不足がなく調和がとれていることを意味します。国際社会の共通目標であるSDGsが新しい概念として我々の生活のみならず研究環境をも席捲しています。「持続可能な活動」のためには、正しい道徳観の醸成が必要でしょう。儒教の持つ道徳観は決して古いものではなく、現代でも通用する大事にすべき概念かと思います。この展覧会を通じて、孔子の教えを感じ取っていただければ光栄です。

最後になりましたが、本特別展を開催するにあたりご協力、ご支援をいただきました全てのご関係の方々に、厚く御礼申し上げます。

令和4年11月
芸術系長 野中勝利

プロローグ

孔子をまつる

孔子をまつる祭典—^{せきでん}釈奠とは、中国で古くからおこなわれていた山川、^{さんせん}廟社や^{せんせいせん}先聖先師を祀る祭礼のことである(図1)。先聖とは、学問体系を確立した偉大なる賢人で、先師とは学問を発展的に継受した有道有徳な賢人を指す。起源は詳らかではないが、儒教が国家の正統教学となった前漢(BC206-AD8)では、儒教の祖である孔子を祀る祭典が確認されている。

日本においては、すでに飛鳥時代後期には始まっていた。『続日本紀』に記載の大宝元(701)年の記事が初見と考えられる。もっとも、5世紀には^{ごきょうはかせ}五経博士によって儒教が伝えられており、その頃、すでに釈奠がおこなわれた可能性もある。延長5(927)年撰進の『^{えんぎしき}延喜式』には、孔子と十哲の画像を掲げて食物や酒を^{じつてつ}供え、^{だいがくのかみ}大学頭が^{しよくふん}祝文を読み、参拝することなどの儀式内容が記されている。

中世において釈奠は、宮中だけでなく、地方でも催された。例えば、肥後国を治める菊池^{しげ}重朝は、文明4(1472)年に孔子廟を建立し、孔子や十哲の像をまつり、釈奠をおこなった。また、下野国の足利学校でも度々釈奠がおこなわれた。その様相は詳らかではないが、天文4(1535)年作の孔子坐像が伝存している。

寛永9(1632)年、林羅山は、江戸上野^{はやしら ざん}忍岡^{しのぶおか}の私邸内に孔子廟(先聖殿・聖堂)を建立した。その際、尾張藩主徳川義直が、孔子と四配(孔子の高弟4人)の木彫像と祭器、扁額を贈った。三代将軍徳川家光は忍岡孔子廟の孔子像に拝謁し、これが将軍による孔子廟参詣の初例とされる。その後も将軍による孔子廟参詣は続き、元禄元(1688)年には、五代将軍綱吉が参詣した。

そして、元禄3(1690)年、幕府主導で、新たな孔子廟を湯島に建立することになり、翌年の正月に落慶、その正殿は綱吉により中国風に「大成殿」と命名された。現在の湯島聖堂である。そこには、忍岡から孔子と四配の木彫像が遷座され、その2月には、湯島で最初の釈奠が行われ、将軍綱吉と諸大名が参列した。

江戸時代を通じて釈奠は形式を変えつつ催された。しかし、明治維新になると大学校の設立などの影響で廃絶されたのである。そして、明治40(1907)年、湯島聖堂において再興され、その立役者となったのが、東京高等師範学校校長の嘉納治五郎であった。



(図1)「積奠図」公益財団法人斯文会所蔵



(参考)湯島聖堂孔子像古写真
個人蔵

明治40(1907)年、第1回孔子祭典が催された時に参加者へ頒布された写真。湯島聖堂大成殿内の厨子内に安置された正面向きの孔子像を捉えている。失われた孔子像の像容を窺い知る上で重要な資料である。



(参考)湯島聖堂孔子像(彩色復元像)
公益財団法人斯文会所蔵

原型制作：柴田良貴 彩色：程塚敏明

彫刻家の柴田良貴氏(筑波大学名誉教授)と日本画家の程塚敏明氏(筑波大学芸術系准教授)による孔子の乾漆彩色の復元像である。湯島聖堂の孔子像が描かれた渡辺小華「孔子像模写」(斯文会所蔵)や古写真、新海竹太郎(1868-1927)による模刻などをもとに復元された。日本画の顔料を使用し、化学合成された水干絵具を用いて、色むらや剥落、絵の具の厚みが調整されている。また、冠や腰紐、台座の唐獅子には金箔が施されている。現在は、湯島聖堂大成殿に安置されている。

17世紀文化人ネットワークのあかし

—「歴聖大儒像」の価値—

京狩野家二世、狩野山雪^{かのうさんせつ} (1590-1651)が、養父山楽の陰から歴史上の表舞台に登場するのが、この「歴聖大儒像」^{れきせいだいじゆぞう} 21幅の制作においてであった。寛永9(1632)年、時に43歳のことである。制作の経緯は、同年に尾州侯徳川義直の援助を受けて、林羅山が上野忍岡に孔子を祀る先聖殿を建設したときのこととして、その嗣子である林鷺峰^{がほう}の「狩野永納家伝画軸序」(寛文9〈1669〉年)(『鷺峰先生林学士文集』巻86)(資料21)に詳述されている。それによると寛永年中に羅山が忍岡に先聖殿(聖堂)を創建したおりに、聖堂の文庫に納めるために「歴聖大儒像」を画かせようとして、徳川義直に仕えていた儒者、堀杏庵に相談を持ちかけた。羅山と杏庵とは藤原惺窩^{せい か}同門であった。寛永の三筆として能書家でもあり画名も高かった、男山八幡宮の社僧^{しょう}、松花堂昭乗^{か どうしょうじよう}に依頼をしたが、昭乗は老齡を理由に狩野縫殿助山雪を推挙した。山雪の養父山楽にとって、昭乗は豊臣滅亡のおりの命の恩人であり、ふたりの紐帯は強かった(土居次義,1970)。おそらくその縁故から山楽の跡継ぎで将来有為の山雪に、この荣誉ある画業を譲ったのではないだろうか。像主としては、伏羲から文宣王(孔子)までの十一聖、孔子の弟子4名(四配)、6名の宋代儒者の計21名である。この21名の選択には羅山の朱子学者としての面目が表れているところでもある。さて上記「画軸序」では釈奠の儀礼があるごとに、これらの画幅を「聖堂の両廡^{りょうぶ}(左右の脇廊)」に並べて人々が観覧したと記述するが、『昌平志』巻1(図1)には、従祀六位として本画像の像主と賛文とが記載されており、その後に双行注において「俱に絵像なり。画員狩野山雪写す。其の賛、周・二程・邵・張の五位は皆朱子の語を用いて、末の一位は吳澄の語を用う。並びに韓人金世濂書す。平日は空位にして祭に方たり懸掲す」と説明する。これによると、平時にはなにも置かれていないところに、釈奠のときのみ、宋儒6幅の画像を掛けるとあるので、人々が実際に観覧した画幅は本学所蔵の宋儒6幅ということとなる。ちなみにその他の15幅の用途については詳しいことは分かっていない。

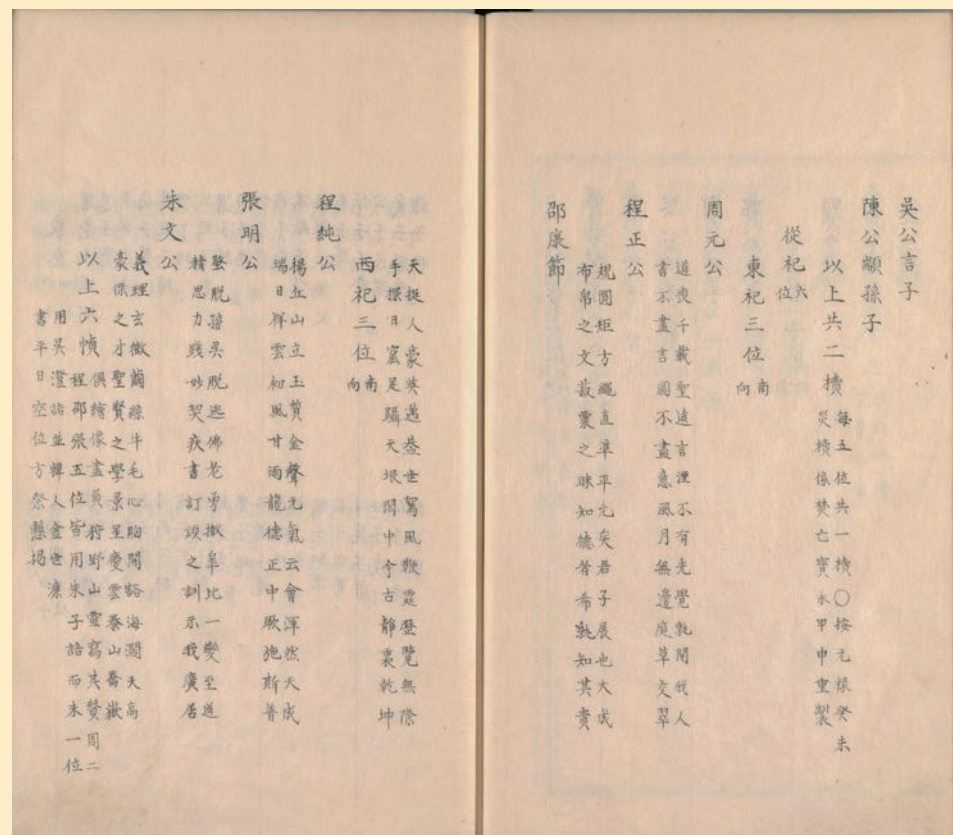
山雪は中国歴代の聖賢の肖像を描くに当たって、粉本^{ふんぼん}として『歴代君臣図像』^{れきだいくんしんず} (1525年)、『新刻歴代聖賢像賛』^{しんこくれきだいせいけんざん} (1593年)など中国明代の肖像入り版本を利用していたことが明らかにされている(杉原たく哉,2020)。本学所蔵の『聖賢像賛』(資料18)は刊年未詳の和刻本だが、寛永20(1643)年の刊記を持つ本もある。明清間の刊本を覆刻したものであり、山雪が粉本利用した書籍の面影は追うことができる。ただそれらの粉本に見られる平板な画像を、淡彩でありながらも立体的で厚みのある身体表現へと昇華させており、とくに衣紋表現などの描線の繊細さは特筆すべきものである(山下善也,2022)。山雪の子、永納が父の草稿を整理して出版した『本朝画史』巻4(元禄6〈1693〉年)(資料23)に狩野家画法の工夫が記されているなかに、「凡そ図像は、三教をもってこれに附す。故に衣紋の曲直、その威儀に従うなり」(人物画法序)と、衣紋表現が人物の特性を表現するときの肝要であることが言われており、本作においても衣服の柔らかい表現、衣紋付近のグラデーションなどが見どころとなっている。

本作のさらなる注目点は、画幅右上に全幅にわたって朝鮮通信使副使、金世濂^{きんせいれん}揮毫による賛文が書せられていることである。ことの経緯は羅山自身が「聖賢像軸」(『羅山林先生文集』巻64)(資料22)に記している。画幅が完成してから4年後の寛永13(1636)年に、おりしも朝鮮通信使副使として来日していた儒者の金世濂に、羅山自身が賛の揮毫を懇望して成ったものである。羅山はこれを「以て家珍とするに足る」と家の誇りとしている。ただし賛自体が羅山自作

のものでないことには注意を要する。羅山自身、金世濂に「古語並びに旧賛を表出」したと言う。現に東京国立博物館所蔵の15幅には経書などからの「古語」が、本学所蔵の6幅には朱子「六先生画像賛」及び元の呉澄の「旧賛」が用いられている。言うまでもなく、羅山には賛文の実作は多数にのぼるが、ここで自作を使用しなかった理由は、寛永3(1626)年の「聖像画軸、思うところありて一辞を措かずしてこれを還えす」(『羅山先生詩集』巻67)と題する詩作があることから知られる。この詩は聖像着賛を求めた永田道慶に対するものであるが、次のような付言があり、羅山の賛に対する思いが知られるのである。「聖像、容易に賛を作らざるは先生の素志なり。この時、先生四十四歳、未だ道慶が請を許すこと肯ぜず。然れども、晩年に及びて頻りに求むる者の甚だ多し。その際、再三これを辞して、猶お止まざる者のこれあれば、則ち峻拒すること能わざる者の左のごとし」と。このように聖像に着賛することに禁欲的であった壮年期羅山の思考の表れと考えられるのである(鈴木健一,1998)。

最後に「歴聖大儒像」21幅が、東京国立博物館に15幅、本学に6幅と分蔵されることとなった経緯を付言しておく。湯島の昌平坂学問所旧蔵書は明治7(1874)年に「^{せんそう}浅草文庫」に移送されたが、湯島の故地に造成された教育博物館の主人公として儒像は返戻されることとなった。その後明治40(1907)年に東京高等師範学校教官が中心となって孔子祭典会(実行委員長嘉納治五郎)を創立し、第1回祭典を執行した。高木三男氏はこのことから、釈奠に使用されていた宋儒6幅が高等師範に移しおかれたのではないかと推測している。

本画像の意義は、狩野山雪の基準作として美術史的価値を有するのみならず、江戸時代初期17世紀の文化人ネットワークのなかで協働的に制作されたことにある。当時のネットワークのありようを知るための証拠でもあり、かつ近代に至っても本学の淵源となる教学上の精神的紐帯として共感の核となって今日に伝存してきた文化遺産であると考えらる。



(図1)『昌平志』巻1 国立国会図書館所蔵

第一章 狩野山雪「歴聖大儒像」

寛永9(1632)年、狩野山雪は、儒学者の林羅山の求めに応じ、「歴聖大儒像」21幅を完成させた。本図は、尾張藩徳川義直の助力により林羅山の私塾にあった先聖殿のために制作されたもので、朝鮮通信使の副使であった金世濂による寛永13(1636)年の着賛がある。制作当初は聖堂の文庫に置かれ、その後は湯島聖堂、近代に入ると浅草文庫に伝来した。現在は、本学と東京国立博物館に分蔵される。

本図は、『羅山林先生文集』や堀杏庵書簡などの同時代の文献史料に記され、制作状況や現在に至る伝来過程などが判明する。とくに本学所蔵の6幅は、儒学の重要祭典である釈奠(菜)のために制作されたものと考えられる。本作は、制作年や発注者、今に至るまでの伝来過程など、詳細な情報が判明する重要な美術品である。

像主の内訳は、伏羲から孔子までの先聖11名、孔子の弟子4名(四配)、宋代の儒学者6名(宋儒)である。表装は、2種類があり、先聖11名と四配・宋儒10名とに分けられる。制作当初から、このような形式のものであったのか不明であるが、孔子を境に表装が変わる点は興味深い。おそらく、先聖を祀る形式、孔子を中心とした四配と宋儒を祀る形式とするべく、仕立てられたものと考えられる。本展覧会では、後者の形式にて展示し、祭祀空間の再現を試みる。

1 『歴聖大儒像（孔子像）』

祖述堯舜、憲章文武。上律天時、
下襲水土。（中庸・三十章）

堯・舜を祖述し、文・武を憲章す。上は天時に律り、
下は水土に襲る。

孔子(BC551-479)。姓は孔、名は丘、字は仲尼。魯(山東省)の生まれ。儒教の祖。約3000人の弟子がおり、特に「身の六芸に通じる者」として七十子がいた。晩年には魯で教育と著述に専念し、『詩経』『礼経』『楽経』『春秋』などを編集したとされる。孔子自身は著作を残していないが、孔子の言行は弟子たちによって『論語』としてまとめられ、「仁」「孝」「礼」を中心とした倫理思想は、中国ひいては東アジアの文化に多大な影響を及ぼし続けている。前漢(BC206-AD8)に儒教が国家の正統教学となってからは歴代王朝で重んじられ、近代に至るまで2000年あまり畏敬の念を集めた。また、故郷の山東省曲阜にある孔子廟をはじめとして中国各地、韓国、ベトナム、台湾、日本でも孔子廟が建立され、まつられている。





3 『歴聖大儒像(曾子像)』

晉楚之富、不可及也。彼以其富、我以吾仁。彼
以其爵、我以吾義。吾何慊乎哉。

(孟子・公孫丑章句下)

晉楚の富は、及ぶべからざるなり。彼はその
富を以てし、我は吾が仁を以てす。彼はその
爵を以てし、我は吾が義を以てす。我何ぞ慊
せんや。



5 『歴聖大儒像(孟子像)』

惟公之生、運適周衰。正途壅底、大道凌遲。
分承三聖、力辨群疑。禽獸楊墨、妾婦秦儀。
宜載于典、宜配先師。(元許衡・祭鄒國公文)

惟れ公の生、運は周の衰うに適る。正途壅底
し、大道凌遲す。三聖を分承し、力めて群疑
を辨ず。楊・墨を禽獸とし、秦・儀を妾婦と
す。宜しく典に載すべく、宜しく先師に配す
べし。



4 『歴聖大儒像(子思像)』

魯繆公、無人乎子思之側、則不能安子思。

(孟子・公孫丑章句下) 亟

魯の繆公は、子思の側に人なければ、則ち子思を安んずる能わず。

見於子思曰、古千乗之國以友士、何如。子思不悅曰、古之人有言曰、事之云乎、豈曰友之云乎。(孟子・萬章章句下)

亟しば子思を見る。曰く、「古、千乗の國、以て士を友とすること、いかん」と。子思悦ばずして曰く、「古の人言えることあり。曰く、『これに事つと云わんか』と。豈にこれを友とすと云うと曰わんや」と。



2 『歴聖大儒像(顔子像)』

舜何人也。予何人也。有為者亦若是。

(孟子・滕文公章句上)

舜何人ぞや。予何人ぞや。為すある者も亦たかくのごとし。



7 『歴聖大儒像(程伯子像)』

揚休山立、玉色金声。
元氣之会、渾然天成。
瑞日祥雲、和風甘雨。
龍德正中、厥施斯普。(朱熹「六先生画像賛」)
揚休山のごとく立ち、玉色にして金声なり。
元氣の会、渾然として天成る。
瑞日祥雲、和風甘雨。
龍徳にして正中なり、その施し斯に普し。



9 『歴聖大儒像(張子像)』

早悅孫呉、晚逃仏老。
勇撤皐比、一変至道。
精思力踐、妙契疾書。
訂頑之訓、示我広居。(朱熹「六先生画像賛」)
早に孫・呉を悦び、晩に仏・老を逃る。
勇んで皐比を撤て、一に變じて道に至る。
精思力めて踐み、妙契疾く書す。
訂頑の訓、我が広居に示す。



11 『歴聖大儒像(朱子像)』

義理精微、蚕糸牛毛。
心胸恢廓、海濶天高。
豪傑之才、聖賢之学。
景星慶雲、泰山喬岳。(呉澄「晦庵画像賛」)
義理精微なること、蚕糸牛毛のごとし。
心胸恢廓なること、海濶く天高きのごとし。
豪傑の才、聖賢の学。
景星慶雲、泰山喬岳のごとし。



10『歴聖大儒像（邵子像）』

天挺人豪、英邁蓋世。
駕風鞭霆、歷覽無際。
手探月窟、足躡天根。
閑中今古、醉裏乾坤。（朱熹「六先生画像贊」）
天挺の人豪、英邁は世を蓋う。
風に駕し霆を鞭うち、歴覧際なし。
手は月窟を探り、足は天根を躡む。
閑中の今古、酔裏の乾坤。



8『歴聖大儒像（程叔子像）』

規員矩方、繩直準平。
允矣君子、展也大成。
布帛之文、菽粟之味。
知德者希、孰識其貴。（朱熹「六先生画像贊」）
規のごとく員く矩のごとく方に、繩のごとく直く
準のごとく平かなり。
允なるかな君子、展なるかな大成す。
布帛の文、菽粟の味。
徳を知る者は希なり、孰れかその貴きを識らん。



6『歴聖大儒像（周子像）』

道喪千載、聖遠言湮。
不有先覺、孰開我人。
書不尽言、図不尽意。
風月無辺、庭草交翠。（朱熹「六先生画像贊」）
道は喪びて千載、聖遠くして言湮む。
先覚あらずんば、孰れか我が人を開かん。
書は言を尽くさず、図は意を尽くさず。
風月無辺にして、庭草交ぐも翠なり。

儒者解説

2『歴聖大儒像(顔子像)』

顔子(BC6世紀前半-BC481〈483とも〉)。姓は顔、名は回、字は子淵、顔淵とも。魯(山東省)の生まれ。『論語』には24回登場し、後世の儒教では四聖の一人「復聖」として崇敬される。孔門十哲の筆頭にあげられ、孔子の弟子の中で最も優秀であったとされる。孔子にその将来を囑望されたが、孔子に先立って32歳で早逝した。顔子は名誉栄達を求めず、ひたすら孔子の教えを理解し実践することを求めた。その暮らしぶりは極めて質素であったという。

3『歴聖大儒像(曾子像)』

曾子(BC505-BC436)。姓は曾、名は参、字は子輿。魯(山東省)の生まれ。孔子の門人で、孔門十哲の一人。後世の儒教では四聖の一人「宗聖」として尊称される。孔門後継のうち、礼を重んずる子夏などの客観派に対し、仁・心の内省に重点を置く主観派といわれる。孝の道に優れていることから親孝行の人として知られ、そのことを孔子に見込まれて『孝経』を著したとされる。朱子は四書の一つ『大学』をその著とした。また、曾子の言行を伝えるものとして『大戴礼』に載せる「曾子」十編がある。

4『歴聖大儒像(子思像)』

子思(BC492-BC431)。姓は孔、名は伋、字は子思。魯(山東省)の生まれ。孔子の孫で曾子に学んだ。天地の理法を説いて、倫理の基準を示した。後世の儒教では道統の継承者であり、四聖の一人「述聖」として尊称される。また、孟子に学問を伝えたとされ、宋代以降は、孔子—曾子—子思—孟子という道統をたて、賢人として尊ばれた。著述の『子思子』はもと23編とされているが、現在では『礼記』の「中庸」、「表記」、「坊記」、「緇衣」の4編がその残簡とされている。中でも『中庸』は宋代に朱熹によって尊ばれ、四書の一つとして位置づけられた。

5『歴聖大儒像(孟子像)』

孟子(BC372-BC289)。姓は孟、名は軻、字は子輿。子車、子居とも言う。孔子の生国に近い魯の鄒(山東省済寧市)の生まれ。子思の門人に学業を受けたとされ、儒教では孔子に次いで重要な人物とされる。また、顔子とともに「亜聖」と仰がれる。人間の本性は生まれながらにして善であるという性善説、社会の成り立つ根本は人民にあるという民本思想を主張し、仁義による王道政治を目指した。また、その言説や主張は『孟子』にまとめられた。宋代以降には経書に数えられ、四書の一つとして重んじられている。

6『歴聖大儒像(周子像)』

周敦頤(1017-1073)。字は茂叔。号は濂溪。宮道(湖南省)の生まれ。朱子学の宇宙論の基礎となる人性説を唱えた。生前は評価されなかったが、朱熹によって孔子、孟子に続く儒者として高く評価された。朱熹によって、孟子以後に途絶えた道統(上古の聖賢の道)を継ぐ者であり、宋学(宋代の儒学)の祖と評価され、宋儒に影響を与えた。また、日本においては「四愛図」の一つである「周茂叔愛蓮図」の画題としても親しまれる。著作に『太極図説』『通書』など。

7『歴聖大儒像(程伯子像)』

程顥(1032-1085)。字は伯淳。号は明道。洛陽(河南省)の生まれ。弟の程頤とともに、二程子と呼ばれ、周敦頤に師事した。儒学のみならず老荘思想や仏教も学び、宇宙の本体を乾元の気とし、理を基礎とする道德説を唱えた。程顥は15歳ごろ弟とともに周敦頤に従学し、26歳で科挙に合格した。当初は王安石の配下にあったが、新法に反対したため後に対立する。そのため、主として地方官を歴任したが人望が厚く治績をあげたとされる。著作に「定性書」「識仁篇」など。

8『歴聖大儒像(程叔子像)』

程頤(1033-1107)。字は正叔。号は伊川。洛陽(河南省)の生まれ。程顥の弟。性理の学を大成し、理気の説を唱えた。程頤を詠んだ詩文や絵画は、兄の程顥より多く、広く受容されていたと見られる。厳格な人柄で、官吏としては政敵を作って成功しなかった。学問・修養の具体的方法を説いた程頤の学説は、南宋の朱熹によって朱子学として大成された。このとき、朱熹がもっとも多く取り入れたのが程頤の学説であったため、朱子学は程朱学とも呼ばれている。著作に『周易程氏伝』『経説』など。

9『歴聖大儒像(張子像)』

張載(1020-1077)。字は子厚。号は横渠。郿県(陝西省)の生まれ。はじめ仏教や老荘思想に傾倒していたものの、後に儒学の独立性を主張するようになり、気の哲学を提唱した。『易』、『中庸』に依拠し、万物の生成を陰陽二気の集散によって説明し、その気の本源的なあり方として「太虚」を説いた。二程子とも交流した。若い頃は兵法を好み、政治に情熱を燃やしたが、范仲淹に諭され、『中庸』を授けられたのを契機として、儒者に転じた。その後、二程子との交流の中で儒者としての自信を確立したとされる。著作に『正蒙』『易説』など。

10『歴聖大儒像(邵子像)』

邵雍(1011-1077)。字は堯夫。出自は范陽(河北省)。百源先生・安樂先生と称された。幼少から才名が高く、共城近郊の蘇門山百源に庵を立てて学問に励んだ。李之才からは河図・洛書、天文、易数を学び、政界の重鎮や二程子らの学者とも交流したが、官には属さず、一生在野の儒家として活動した。「加一倍の法」と呼ばれる数理計算によって、万物の生成や宇宙の変遷を説いた。この試みは、その後朱熹などの儒家に影響を与えたと言われている。著作に『皇極經世書』『伊川擊壤集』など。

11『歴聖大儒像(朱子像)』

朱熹(1130-1200)。字は元晦。出自は安徽省で、南劍(福建省)の生まれ。周敦頤・張載・二程子らの理気世界観に影響を受け、儒教の新体系である朱子学(宋学)を大成した。また、五經のうち、『礼記』から取り出した『大学』『中庸』に『論語』と『孟子』をあわせて四書とし、注釈書である『四書集注』を著した。その後四書は科挙の科目に採用され、重要視された。日本にも影響を与え、朱子学は身分制度に重きを置いたために徳川幕府の目指したヒエラルキーと相まって、尊重された。

狩野山雪「歴聖大儒像」の修復

大学図書館は貴重な資料の保存と公開の責務を担っているが、資料の状態によっては公開が困難なものも少なくない。狩野山雪「歴聖大儒像」は料紙に淡彩で儒者が描かれた掛軸6幅で、いずれも折損^{おりぞん}の発生が著しく、本紙、表装裂地^{ひょうそうきれじ}ともに虫喰による欠失があった。一部の料紙は表面が毛羽立ち、絵具層は剥落^{はくらく}が生じ、経年による汚れやシミ、裏打紙の糊離れも確認されていた。

2019～2021年度に実施した「歴聖大儒像」6幅の保存修復は、朝日新聞文化財団文化財保護助成(3か年)、出光文化福祉財団美術品修復助成(2か年)、住友財団文化財維持・修復事業助成(2か年)によって実現したものである。

修復は株式会社修護により、国指定文化財の修理に準じた手法による本格解体修理を実施した。ここでは、実際の修理工程について紹介する。

(1)修復前調査

修復前に、破損状況、構造、使用材料、作品形態等の調査を行い、画像記録、損傷図面等の調査カルテを作成した(写真1)。調査は修理方針を決めるうえで大切であり、今回は赤外線写真調査の段階で、汚れ、痛みがかなり進んでいたこと、過去の修理によって本紙が部分的に薄くなっていることなどがわかった。

(2)汚れの除去・剥落止め・解体

柔毛の刷毛や筆等を用いて本紙表面に堆積している微塵類^{みじん}などの付着物を乾燥状態で除去し、絵具層の剥落および剥落の懸念される箇所には、膠水溶液を塗布し剥落止め(写真2)の処理を行った。その後、軸、表装部材を取り外し、本紙の表面よりイオン交換水を噴霧し、下に敷いた吸水紙へ水溶性の汚れや酸化物等を吸着させ汚れを除去した(写真3)。水溶性の汚れが除去された本紙は、全体が明るくなった。

(3)旧裏打紙等除去・補修

汚れの除去後は、旧裏打紙、旧肌裏紙、旧補修紙等の除去を行った(写真4)。経年による劣化の激しい裏打紙の除去は、布海苔を用いレーヨン紙を表打ちして表面の保護を行った上で、本紙を傷めないようにピンセットで繊維をめくりながら慎重に行われ、作業には多くの時間を必要とした。その後、竹と楮^{こうぞ}の混合紙を作製し、料紙と類似した補修紙として欠失箇所すべてに補填した(写真5)。

(4)裏打・折損の修繕

欠失箇所補修の後は、本紙への裏打ちを行った(写真6)。新裏打紙は本紙および欠失箇所補修の色味を考慮し選定した。増裏打ちを行った後、折損が生じている箇所および懸念される箇所に対して、裏面側より折伏せ(2-3mmに幅に裁断した楮紙)を小麦澱粉糊で貼付し、折損を修繕した(写真7)。

(5)付廻し・裏打

本紙の裏打ち、折伏せ、裂の補修等の終了後、本紙と表装裂地^{かけふくそう}を掛幅装の形式に接合する(写真8)。その後、接合部分の段差が生じるのを防ぐため中裏打ちを行い、次に作品の裏面全体を整えるために総裏打ちを施した(写真9)。

(6)補彩・乾燥・仕上げ

補修材を補填した箇所に補彩を行った(写真10)。新たに描線を描き加えるようなオリジナル性を損ねる加筆は行わず、地色に合わせた補彩に留め全体の調和を保つ。裏打ち、補彩後は仮張り板に貼り込み、表裏とも十分に乾燥させ仕上げの工程に進んだ(写真11)。

(7) 完成・保存

本紙を取り囲む金襴^{きんらん}の裂地や風帯もきれいに補修し、汚損破損状態のため再利用できずに新調した打ち込み^{かん}鑑、巻紐等とともに掛幅装に仕上げる。その後、公開用電子画像データを作成するため高精細デジタルカメラによる撮影を行い、修復工房での作業はすべて終了した。修復後の作品は、折損等を防ぐため太巻添軸^{ふとまきそえじく}を作成(写真12)し、正絹の裂に包み印籠蓋箱^{いんろうふたばこ}に収納した。



(写真1) 修復前調査



(写真2) 剥落止め



(写真3) 汚れの除去(湿式除去)



(写真4) 旧肌裏紙等除去



(写真5) 補修



(写真6) 本紙への裏打ち



(写真7) 折損の修繕



(写真8) 付廻し



(写真9) 総裏打ち



(写真10) 補彩



(写真11) 仮貼り



(写真12) 新調した桐製太巻添軸

3年間の修復を終えた本作品は、損傷個所が丹念に修復され、儒者のやわらかな表情や衣の淡い色合いなど、描かれた当時の姿を想像させるものとなった。修復期間中は、定期的に修復工程の確認のために工房を訪問し、その記録は附属図書館Facebookでも紹介した。今後は、貴重な学術資料として未来に受け継がれることを願っている。

第二章 釈奠器

釈奠では、孔子像などとともに、釈奠器と呼ばれる漆工品が用いられた。その内容は、時代や地域によって異なる。湯島聖堂の釈奠は、元禄4(1691)年の完成時点で大法と祭器が整えられたが、その後の度重なる火災によって縮小簡略化されていった。東京国立博物館に所蔵される釈奠器は、安永年間(1772-1781)に献納されたもので、元禄年間(1688-1704)に納められたものの再調品。幕府により山内家や蜂須賀家、大久保家や井伊家、会津松平家といった諸大名に献納が命じられた。その配置は厳格に定まっている。一例を示せば、剣を正位の傍に飾り、正面前方には香爐、香盒、香笏を置いた香案を据え、その左右に燭台を配す。正面階下の左右に尊案を置く。「雲龍蒔絵尊案」(資料12)は、この尊案にあたる。尊案には、雷尊と犧尊を飾り、玄酒と清酒を盛る。

湯島聖堂の釈奠器については、『昌平志』巻5の「礼器誌」に詳しく書かれている。『昌平志』は、寛政6(1794)年に昌平坂学問所の員長を務めた大家遜(1750-1814)によって著された。「礼器誌」には80以上の礼器が図示されている。名称や形状、献納者、献納年月などの記載があり、本展で展示される釈奠器も記されている。本展では、湯島聖堂に伝来し、現在は東京国立博物館に所蔵される「雲龍蒔絵尊案」と「海藻蒔絵俎」の2点を展示する。なお、この2点の釈奠器は、東京高等師範学校(筑波大学の前身校)の所蔵品であった。

12 雲龍時絵尊案

山内豊雍献納 安永3(1774)年



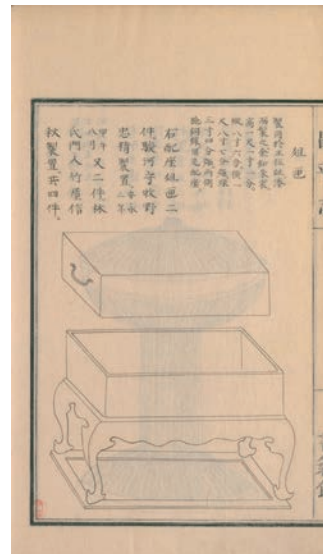
(参考)『昌平志』巻5
国立国会図書館所蔵

尊案とは、尊と呼ばれる酒を入れる器を置く机である。釈奠においては、尊案の中央には、雷神時絵尊を置き、その左右に水牛を象った犧尊ぎそんと象を模した象尊が並べられた。

総体に黒漆、天板の中央に龍をあらわす。空間に雲を配し、ひれ鰭と脚部に雷文を施す。土佐藩9代目の山内豊雍とよちか(1750-1789)による献納品。安永3(1774)年12月に献納された。天板裏に金時絵銘があり、来歴がわかる。東京高等師範学校旧蔵品。資料13とともに明治37(1904)年6月16日、東京高等師範学校校長の嘉納治五郎によって帝室博物館に寄贈された。

13 海藻時絵俎

蜂須賀治昭献納 安永4(1775)年



(参考)『昌平志』巻5
国立国会図書館所蔵

俎とは、鯉鮒いのこ、家、小鹿、大鹿などのにえ贄を入れる台のこと。長方形の被蓋造の箱に四脚を付けている。表には詰つめ梨地を施し、内側は朱漆塗。縁は金沃懸地。箱の蓋、身の側面、鰭と脚部に海藻を散らす。本作は、徳島藩11代目の蜂須賀治昭(1758-1814)による献納品。安永4(1775)年2月に献納された。台裏に金時絵銘がある。

14『^{けつりし}闕里誌』巻1

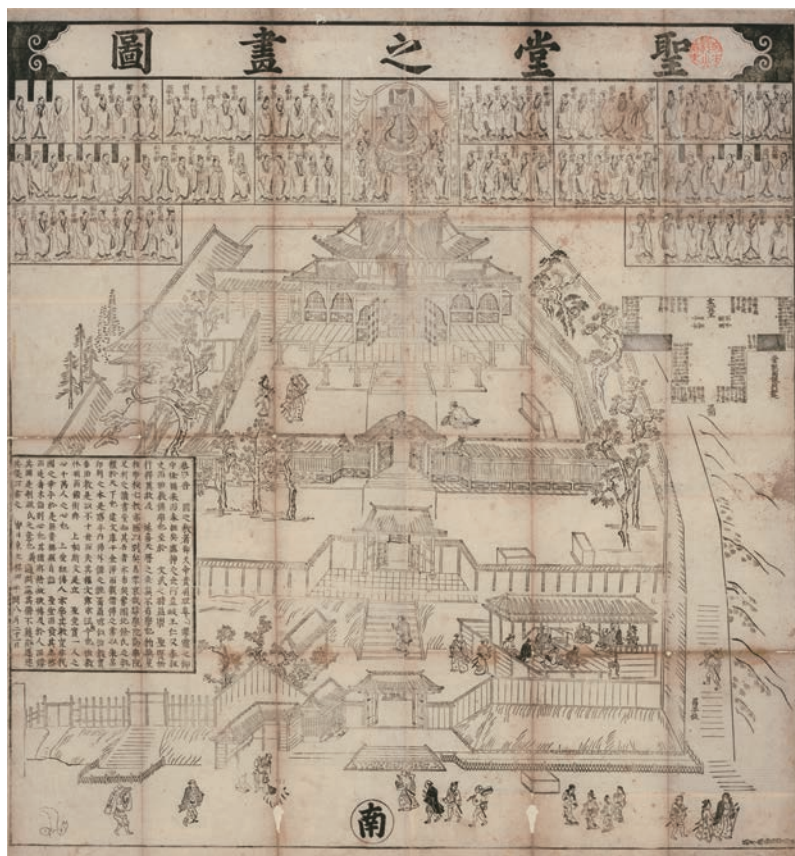
(明)孔貞叢撰 大坂：河内屋喜兵衛 宝永6(1709)年刊 12巻6冊



孔子の子孫と言う孔貞叢が孔子廟の制度・祭祀・沿革について集成した書物の和刻本。^{けつり}闕里(山東省曲阜県)は、孔子が弟子の教育にあたり、没した地であり、孔子廟が所在する。巻1には「図像誌」が収められ、孔子の肖像画のほか、「^{らいもず}礼器図」、すなわち孔子祭(積奠)に使用されていた神聖な器物の図絵が見える。そのなかには、江戸時代に湯島聖堂で執行された積奠において祀られていた礼器と同様の形態をもつものも見受けられる。

15『^{せいどうのえず}聖堂之画図』

菱川師宣あるいは菱川派の作 元禄4(1691)年刊 1枚



元禄4(1691)年に移転したばかりの湯島聖堂が描かれている。落款は見られないが、人物描写などは菱川師宣あるいは菱川派の特徴を示す。聖堂が大きく配され、その周囲には行き交う人びと、仰高門内の東舎で行われる公開講釈の様子などが描かれる。また、画面上部には孔子や十哲、聖堂内を飾る扁額に描かれた先賢先儒の図像が並び、画面中央右には内陣の配置が示される。画面中央左には徳川光圀によると言われている一文が枠内に挿入される。この文には、日本の儒教の伝来、その長い低迷への嘆きと、聖堂建立と儒学の復興に対する称賛、出版にいたる経緯が記述されている。

第二章

歴聖大儒像への道

本章では、歴聖大儒像における図様の成立と、そこに込められた意味について解釈を試みる。

狩野山雪は、中国将来の^{はんぽん}版本を重視しており、山雪を含む京狩野派では、舶載された版本を用いて絵画制作をおこなうことが通例となっていた。これは、御用絵師であった江戸狩野の^{かのうたんゆう}狩野探幽らが、鑑定のために多くの中国絵画を見る機会に恵まれていたのに比べ、山雪はそのような機会が少なかったためと考えられる。そのため、舶載された版本をもとに「歴聖大儒像」を制作したのである。

また、本図は釈奠に掲げるために描かれたものであるが、もう一つ、別の角度からも制作意図を想定することができる。それは、羅山の^{どうとう}道統論である。道統とは、孔子から曾子、孟子というように続く先聖先師の系譜を指す。羅山は自らを帝堯や帝舜などの五帝、孔子やその弟子たち、宋代の朱子へ連なることを主張した。加えて、南宋時代の理宗朝(1224-1264)の画事を参考にした可能性も考えられる。^{しょうてい}紹定3(1230)年、理宗(1205-1264)は「道統十三賛」を作った。後に、これを元に画院祇候であった馬麟(1180頃-1256以降)に命じて、先聖先師13名の肖像画を制作させた。その内訳は伏羲、帝堯、帝舜、^{だい}大禹、^{せいとう}成湯、^{ぶん}文王、^ぶ武王、^{しゅうこう}周公、孔子と四配である。その後、理宗は、^{じゅんゆう}淳祐元(1241)年に孔子と四配、程伯子、程叔子、張子、邵子の^{じゅう}従祀を公式に定めている。羅山たちは、この「道統十三賛」や従祀のパターンを踏まえた可能性があり、「歴聖大儒像」は、南宋由来の朱子学における道統への強い意識を感じさせる。

16『賢儒図像扁額模本』 右ノ1

松谷天来写 14枚



湯島聖堂の内陣を飾った先賢先儒89人を描いた扁額の模本(16枚中2枚欠)。扁額は、元禄元(1688)年、狩野益信^{ますのぶ}(1625-1694)によって制作されたが、元禄16(1703)年の火災によって焼失。翌年の宝永元(1704)年には狩野常信^{つねのぶ}(1636-1713)によって再制作された。その後、聖堂は二度火災に遭うが、この常信のものが被害を免れたかどうかは不明。本図は、この常信作の模本にあたると思われる。

各図裏には、朱文方印「松谷天来粉本之印」が捺されている。この「松谷天来」については、渡辺華山^{かざん}(1793-1841)の次男である渡辺小華(1835-1887)にあたる説が提示されている。

(参考)『賢儒図像扁額模本』(復元) 右ノ1

制作：藤田志朗；筑波大学日本画研究室 16枚 公益財団法人斯文会所蔵



日本画家の藤田志朗氏(筑波大学名誉教授)を中心とした筑波大学日本画研究室によって復元された。欠損部の復元にあたっては、同じ主題の狩野常信「賢哲図像」(東京国立博物館所蔵)を参考にしている。絵具を焼いたり、岩絵具に墨を混ぜたりして、退色や剥落した状態となるように注意し、制作された。現在は、湯島聖堂大成殿に掛けられている。

17『三才図絵』人物4巻

(明)王圻纂修 (明)男思義校正 万暦己酉(1609)序 106巻60冊



類書と呼ばれる百科事典。明の万暦35(1607)年完成。万暦37(1609)年刊。^{おうき}王圻とその次男の^{おうしぎ}王思義による編纂。世に存在する様々な事象を14部門に分けて、絵を主体にして解説をほどこしている。このうち、「人物」の部には、「歴聖大儒像」に描かれた「三皇五帝」や「武王」、「孔子」、「周子」などの肖像が描かれている。狩野山雪は、この『三才図会』を粉本として、「孔子」と「四配」の顔貌を描き分けた。

18『聖賢像賛』巻4

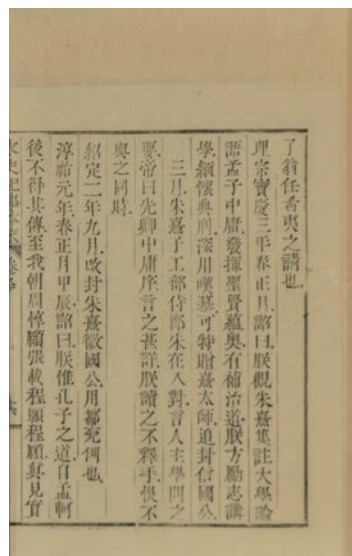
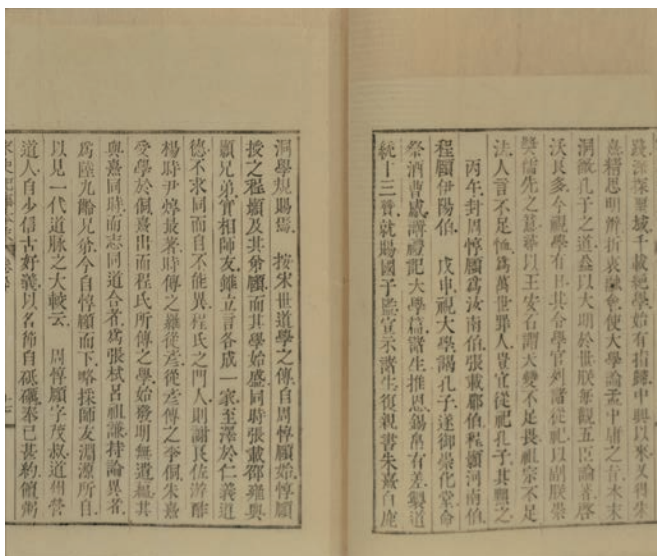
(明)冠洋子撰 4巻2冊



原本は、明代の万暦21(1593)年刊。本学所蔵本はその和刻本で、刊行年は不明。先聖について、それぞれ略歴、図像、賛文が記されている。本展には出品されないが、「歴聖大儒像」のうち文王像は、この『聖賢像賛』の原本を下敷きとしており、顎髭や頬髭の形状、目じりが上方に上がる切れ長の目、通天冠の表現などが共通している。山雪は、この『聖賢像賛』を手本としていた。

19『宋史紀事本末論正』 卷80

(明)馮琦;陳邦瞻等原編 109巻(存92巻)25冊

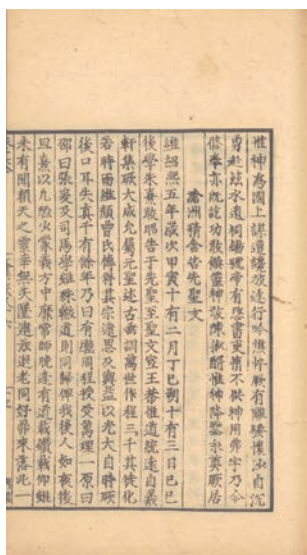
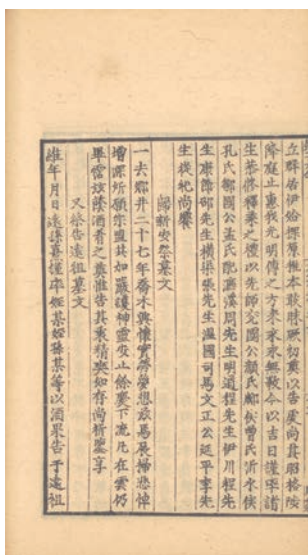


明末の官僚であった陳邦瞻(?-1623)によって編纂された宋朝の歴史書。紀事本末体と呼ばれる形式によって書かれており、各事件について完結的にその起承転結について年月日を追って叙述する体裁を採る。清朝中期の『四庫全書』編纂のおりにも正目に入れられ、後世、高い評価を得ている。

紹定3(1230)年、理宗は自らの道統を保証するため、「道統十三賛」を作ったとする記事が見受けられる。後に画院祇候の馬麟は、その理宗「道統十三賛」に基づいた肖像画13幅を制作した。『羅山林先生文集』には、『宋史』に関する記事があり、羅山は、この「道統十三賛」を知っていた可能性がある。

20『晦庵先生朱文公文集』 卷86

(宋)朱熹撰 四部叢刊:集部40 上海:商務印書館 100巻・目錄2巻・続集11巻・別集10巻・50冊



南宋時代の儒学者である朱熹(1130-1200)の文集。明・嘉靖刊本影印版。朱熹の若年より晩年に至るまでの詩や封事、奏状、申請、跋文、祭文、墓表などを分類して、ほぼ年代順に収録されている。

南宋時代の釈奠は、朱熹によって、孔子と四配、周子、程伯子、程叔子、張子、邵子の従祀があることが定められた。これにより「滄州精舍告先聖文」(巻86)にあるように「恭しく道統を惟う」と先聖の教えを伝える系統としての「道統」を保証したのである。

狩野山雪と粉本

京狩野の絵師、狩野山雪は厳格な典拠主義をもっていたと指摘されている。俗説に惑わされ、特に中国由来の画題を誤って描くことを批判し、信頼できる典拠に即して正しい内容を、ふさわしい画法で描くことを重視していたのである。

では、「歴聖大儒像」(以下、本作)(図1)の制作にあたり山雪は何を典拠としたのか。絵師が制作のための資料とした先人の作品、古画の模写や縮図、版本などの手本といった手控えを粉本と呼ぶが、長らく断絶した積奠の資料は少なく、山雪は本作の粉本を中国の版本に求めた。主に『^{れきだいこじんぞうざん}歴代古人像贊』、『歴代君臣図像』、『新刻歴代聖賢像贊』、『三才図絵』を用いたようで、版本には中国の聖人や皇帝、儒学者などの図像が掲載されている。明代の1498年刊行の『歴代古人像贊』からは伏羲・黄帝・帝堯・大禹・周公、1525年刊行の『歴代君臣図像』からは神農・帝舜・成湯・武王と周子・張子・邵子・程伯子・程叔子・朱子、1593年刊行の『新刻歴代聖賢像贊』からは文王、1610年刊行の『三才図絵』からは孔子・孟子・顔子・曾子・子思を参考として描いたと考えられる(図2)。版本の図像を、ふっくらとした面立ちや柔らかな衣服へと変化させた、実態感のある描写に彼の仕事ぶりを窺うことができる。

これらの粉本は無彩色で、本によっては上半身しか図像が掲載されていず、衣服の形態を確認できないものもある。本作の衣服は中国の儀礼に則るが、仏教とも通じるような形態であることが指摘されている。おそらく、注文主の林羅山や堀杏庵らと本作に関して密な相談を行っていく過程で、彼らの意向を強く反映した結果とみられる。儒教および仏教に深い理解があった羅山は、日本で正統な儒学を普及させるために、中国的なテキストをそのまま示すのではなく、あえて仏教的な要素を含ませた。

羅山は儒教を積極的に根付かせるため、仏教の要素も意図的に選択し、むしろそのことによって本作の聖性をより強化した。本作の制作では、山雪はさまざまな粉本に典拠をもちつつ、像主をリアルな存在として有機的に構成している。羅山のややこしいともいえる注文に、粉本への忠実な態度と確かな技術で山雪は応えたのである。



(図1) 程伯子 『歴聖大儒像』部分



(図2) 程伯子 『歴代君臣図像』部分
国立国会図書館所蔵

馬麟「道統五像」と「歴聖大儒像」

「歴聖大儒像」は、伏羲(図1)から朱子までの先聖先師を図としたものである。ここでは、先聖先師を主題とする先行作例の影響について考えてみたい。

「歴聖大儒像」と陣容が近い作例として、南宋の画院祇候であった馬麟による「道統五像」がある。本図は、紹定3(1230)年の理宗作「道統十三贊」を元に描かれたものである。現在、台湾の国立故宮博物院に、伏羲(図2)、帝堯、成湯、大禹、武王の5幅のみが残る。理宗は朱子学に傾倒し、本図は、彼の政治的な理想像を表したものであった。天命に対する皇帝の徳が不足している時には、先聖を祀ることで道統が保証されるという考え方がある。理宗の在位時には、史弥遠という重臣によって専制政治がおこなわれたが、理宗には権力がなく、民衆に重税が課せられた。これが、南宋滅亡の要因を作ったと言われる。理宗は「道統十三贊」によって、王徳を満たし、道統を保証しようとしたのである。

このような馬麟の作品が、「歴聖大儒像」に影響を与えた可能性はないのだろうか。両者の様式や構図に共通点は認められず、その影響は考えにくい。ただし、類似する絵画が、中世末期に日本に伝来していた可能性がある。その傍証として、16世紀前半制作の伝狩野元信筆「鎮宅靈符神像」(園城寺)(図3)をあげる。鎮宅靈符神とは、鎮宅靈符を司る神で、中世から近世における民間信仰として知られる。また鎮宅靈符神は、道教の北極星神で、易、八卦とも密接に関係し、北極星と同体とみなされることが多い。これと像容が酷似する作例が、馬麟の「道統五像」にある伏羲像である。伏羲は、易学の祖として知られ、おそらく同じ易学と関係する人物として伏羲像が、日本では鎮宅靈符神像として転用されたものと解釈できる。画面右下を見下ろす人物、その視線の先には玄武らしき亀と蛇とが描写される。両図の構図は酷似しており、馬麟の伏羲像の像容が日本に伝来していたことが理解できる。

林羅山は、「道統十三贊」を知っていたのかもしれない。武田兼山『道統小伝』に冠した寛永21(1644)年の年紀をもつ羅山の序がある。そこには簡便な形で五帝から明儒までの「聖賢の事蹟」を知るための拠るべき書が列挙されており、羅山が道統を強く意識していたことが読み取れる。

「道統五像」と「歴聖大儒像」には、様式上の接点は認められないが、その人物の構成と道統への意識が共通する。羅山や山雪の胸中には、理宗朝の政治体制と絵画があったのであろう。



(図1) 狩野山雪「歴聖大儒像」のうち「伏羲像」東京国立博物館所蔵



(図2) 馬麟「道統五像」のうち「伏羲像」台湾・国立故宮博物院所蔵



(図3) 伝狩野元信筆「鎮宅靈符神像」園城寺所蔵

第四章

歴聖大儒像の評価

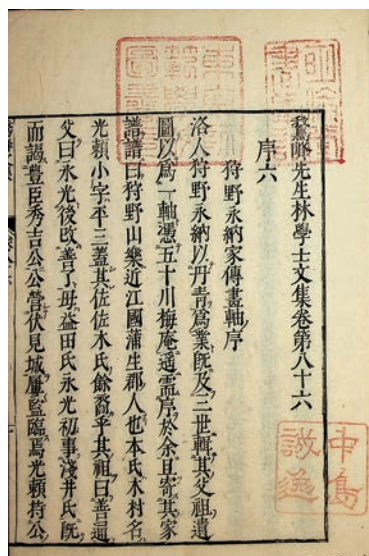
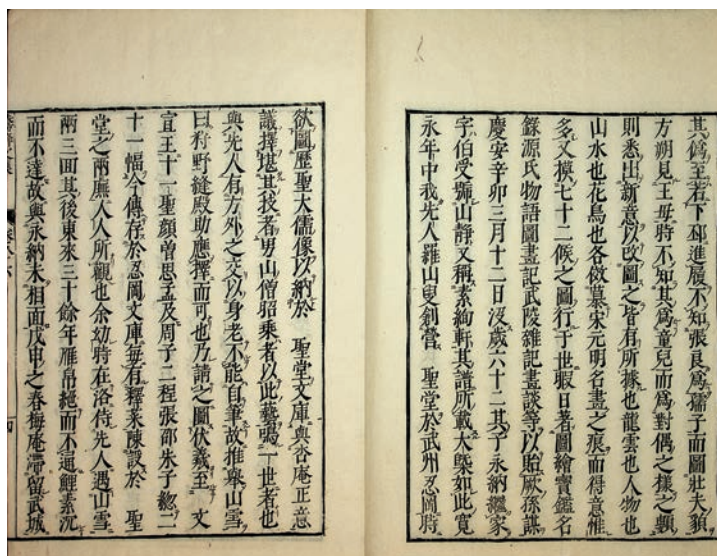
美術史において、「歴聖大儒像」は、狩野山雪の画業、とくに唐人物画の特色を知るための好個の資料、近世儒学の発展と美術の深い関わりを示す資料として注目されている。

東京高等師範学校教授(後に東京文理科大学東洋史教室教授)であった中村(後に中山)久四郎は、本学所蔵の「歴聖大儒像」6軸を写真複製した『聖賢画像』が大正3(1914)年11月8日に举行された第8回孔子祭典の記念品として作成されたさいに、その解説を著した。すなわち、羅山による「歴聖大儒像」創出の経緯、賛を揮毫した金世濂が務めた朝鮮通信使について解説した。文化を中心とした東洋史と国史(日本史)の関連性に強い関心を有し、経史兼修、つまり歴史・儒学両者の研究に取り組んでいた中村によって、林羅山「聖賢像軸」、同鷺峰「狩野永納家伝画軸序」の原文を引用しつつ、「歴聖大儒像」の学術的評価の基礎が提示されたのである。

東京高等師範学校教授(後に東京教育大学文学部教授)であった家永三郎は、昭和23(1948)年に日本学士院から恩賜賞を受賞した『上代倭絵全史』において、「聖賢像(歴聖大儒像)」が釈奠にさいし礼拝の対象として孔子廟内に掛けられる肖像画である「釈奠画像」と位置づけた。これらの聖賢像は、古代後漢王朝以来の永き伝統をもつ中国絵画が日本に及んだもので、大陸文化摂取の一例と指摘する。しかし、現存する絵画を総覧すると、それらの最初の図像であった、吉備真備の将来による「唐本」の面影をうかがうことは難しいとし、それらは「本邦画師」の「創案」と見たのである。

21『^{が ほうせんせいりんがく し ぶんしゅう}鷺峰先生林学士文集』巻86

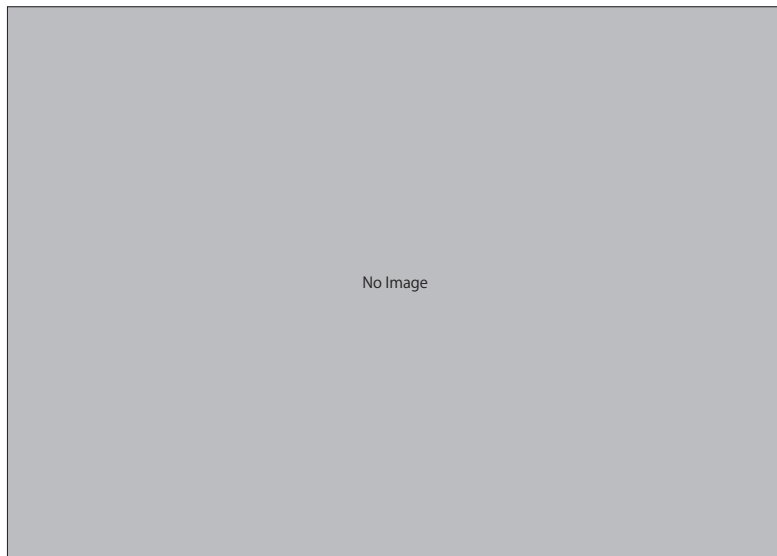
林鷺峰著 林鳳岡ほか編 元禄2(1689)年刊 文集120巻・目録2巻・詩集120巻・目録2巻・附自叙略譜1巻105冊



林家2代鷺峰の著作を集成した全文集。本資料は尾張藩校明倫堂^{めいりんどう}の旧蔵書。巻86所収の寛文9(1669)年「狩野永納家伝画軸序」によれば、鷺峰の父林羅山は、江戸上野忍岡の邸内に孔子を祀る先聖殿(聖堂)を創建し、その文庫に「歴聖大儒像」の画幅を納めようとした。同じ藤原惺窩の門下で尾張藩主徳川義直に仕える堀杏庵の紹介で石清水八幡宮滝本坊の松花堂昭乗に制作を依頼したが、固辞され、代わりに昭乗が推挙する京狩野家2代山雪を頼ることとなった。完成した画幅は、釈奠時に聖堂の両廡(左右の脇廊)に並べ、観覧された。

(参考) 狩野山雪宛 松花堂昭乗書状

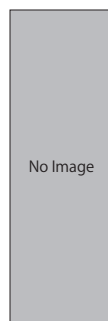
年未詳 根津美術館所蔵



(本紙)



(端裏書)

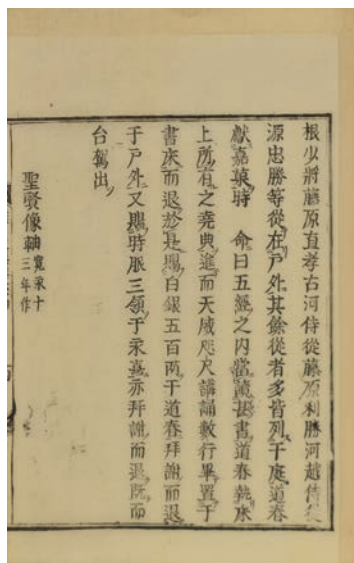
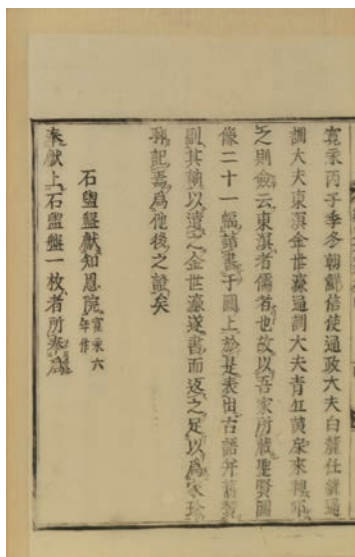


(包紙)

松花堂昭乗^{しょうかうどう}(惺々翁)が狩野山雪に宛てた書状。昭乗は、石清水八幡宮滝本坊の社僧で、晩年には松花堂と呼ぶ草庵に住した。寛永の三筆に数えられる能書家であるが、絵画・茶道でも高名の文化人であった。本史料では、「押絵^{おしゑ}絶^{ぜつ}へ言語^{ごんご}二候、無^な所^{しよ}残^{ざん}之条、さためて可^た相^{べし}叶^ふ上意^{じやうい}二」^(見事)、「返々糸とも、いつれもいつれもみことにて、驚^{おどろ}カス^か目^め斗^と二候」と、昭乗が「上意」により制作を依頼した山雪の作品を絶賛している。昭乗が「歴聖大儒像」の制作に山雪を推挙するに至る両者の交流をうかがわせる。

22『羅山林先生文集』巻64

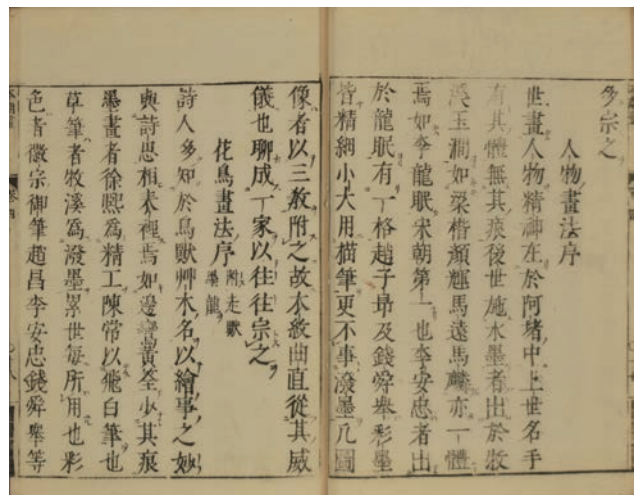
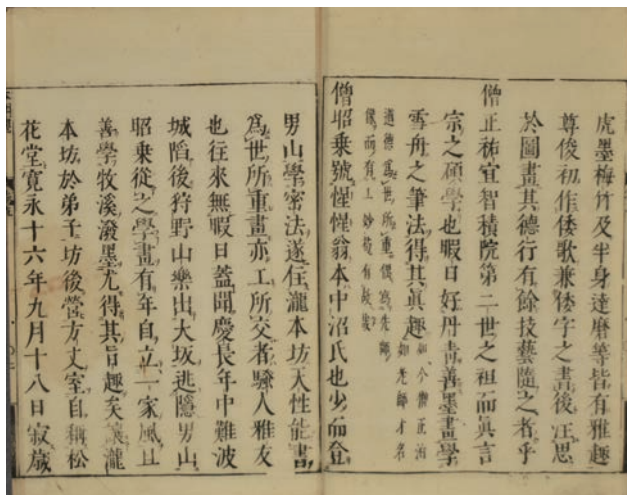
林羅山著 林恕(鷲峰)編 寛文2(1662)年刊 文集75巻・詩集75巻・目錄3巻・附録5巻・60冊



徳川家康から4代の将軍に出仕した儒学者林羅山の著作を集成した全文集。本資料は陸奥磐城平藩主内藤義概(義泰、風虎)の旧蔵書。巻64に収録される「歴聖大儒像」の画幅完成から4年後の寛永13(1636)年に、賛の揮毫を朝鮮通信使副使金世濂に懇望、実現した経緯が記される。壮年期の羅山は着賛することに禁欲的で、実際の賛も「古語並びに旧賛を表出」した文言とされた。羅山は、儒学を深く理解する金世濂の賛を得たことにより、「歴聖大儒像」を「以て家珍とするに足る」と述べ、家の誇りとした。

23『本朝画史』巻4・5

狩野永納撰 京：丸屋源兵衛；吉野屋惣兵衛 元禄6(1693)刊 5巻5冊



狩野山雪の子、永納が亡父の草稿を整理して出版した書物。本資料は、近代の孔子祭典開催に尽力した東京文理科大学初代学長三宅米吉の旧蔵書。巻4所収の「人物画法序」には、狩野家の画法の工夫として「凡そ図像は、三教をもってこれに附す。故に衣紋の曲直、その威儀に従うなり」とあり、「歴聖大儒像」にも見られるように、衣紋表現が人物の特性を表現するときの肝要であると述べられている。巻5には画家の伝記が収められ、その中に松花堂昭乗の伝記がある。

寛永13年朝鮮通信使副使金世濂とその交流

李氏朝鮮の使節である朝鮮通信使は、江戸時代を通じて12回来日した。「歴聖大儒像」の賛を揮毫した金世濂(東溟)は、寛永13(1636)年に来日したその三使のうち副使を務めた朝鮮の官吏・知識人である。彼の行動は自身が著した来日の記録である「海槎録」(図1)に詳しい。

この通信使は、「泰平之賀」(天下泰平の祝い)のために日本側から派遣を要請された。その一行は12月6日の江戸到着後に、將軍徳川家光から聖地日光山(栃木県日光市)の「遊覧」に招待された。日光山の東照宮はこの年の4月に、ほぼ完成したばかりであった。いわゆる柳川一件の解決をふまえた両国の外交上、重要な機会であり、かつ將軍の威光の発揚も期待しての提案であった。「日光山遊覧」は当初の予定にはなかったものの、家光の熱心かつ丁寧な迎接到応え、国書の速やかな伝達を条件に受け入れられることになった。

江戸を12月17日に出発した一行は21日に日光山へ参詣し、東照宮の結構に目を驚かすことになった。通信使はいずれも文事に長けた知識人である。家光の重臣でその接待にあたった老中松平信綱は、永く日光山内を鎮めるためとして、三使の漢詩を所望し、三使は直ちにこれに応じたという。その漢詩は、「東照社縁起」(真名本)巻中および「東照大権現縁起」(仮名本・絵巻物)巻第4第3段「朝鮮人」(図2)に記録され、実際、寛永17(1640)年に東照宮へ奉納され、本殿常住の神宝となった。次の七言律詩は、この両縁起に載る金世濂の作品である。

中天寺刹壓嶙峋 東照長留法像真 白馬尚懸金鎖甲 紅雲全露玉宮神
千齡力鎮山河定 百戰功垂宇宙新 権現極知同一揆 宏図寧復讓前人

金世濂は即興で、山河の自然美の中に造形された東照宮の絢爛を賞讃した。彼の文才がうかがえる作品である。「朝鮮人」の段には、江戸で幕府御用絵師の地位を確立した狩野探幽によって描かれた、東照宮拝殿へと進む一行の図があり、朝鮮から持参された轎に乗った三使、すなわち正使任統(白麓)、副使金世濂、従事官黄床(青丘)が見える。探幽もまた、直接または間接に金世濂らと交わったことが推し量られる。

一行は24日に江戸へ戻り、29日の出立まで滞在した。この間、26日に、將軍家光のもとで外交文書の作成や東照宮の祭祀に関わっていた儒学者林羅山が金世濂のもとを訪れた。羅山は、儒学をめぐり金世濂と筆談で会話し、その結果、互いの学識を知ることになった。その場で羅山は金世濂へ、4年前に狩野山雪に描かせた「歴聖大儒像」への着賛を依頼し、翌27日に受け取るようになったのである。

こうして「歴聖大儒像」21幅は完成した。將軍家光の威光を発揚する役割を求められた朝鮮通信使金世濂は、正にその求めを実現する善隣外交のなかで直接・間接に交歓した日本の絵師の技量、儒学者の学識を知り、賛を揮毫したのである。「歴聖大儒像」は、かかる歴史的な国家間交流の中で生み出された、時代の申し子たる文化遺産と言えよう。



(図1)『海槎録』

韓国・国立中央図書館所蔵



(図2)「東照大権現縁起」巻第4第3段「朝鮮人」日光東照宮所蔵

エピソード

東京高等師範学校と釈奠

筑波大学は、明治5(1872)年に湯島の地で開校した師範学校を前身校としている。同年の3月に同じ地で開催された博覧会は、東京国立博物館および国立科学博物館の起源となっている。また、この湯島の地は、東京大学やお茶の水女子大学の起源ともなっており、近代の学知が集結した場所でもあった。

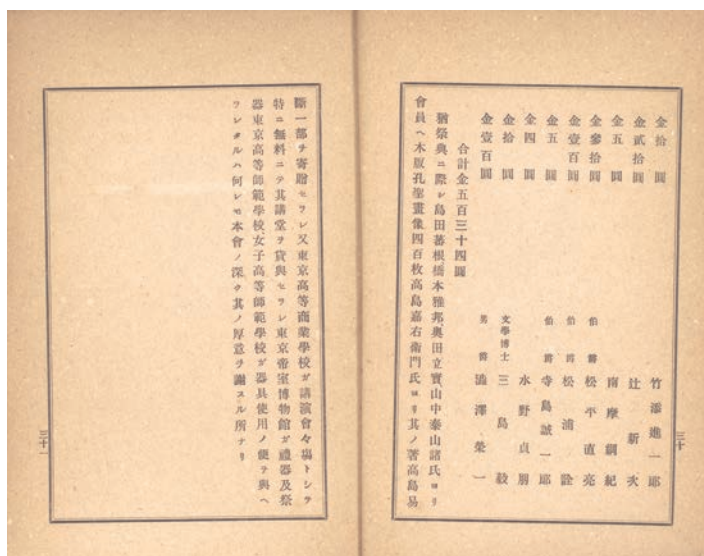
近代という時代には、西欧思想による文化、そして日本が学んできた漢学文化という二つの立場が対立していた。西欧思想が優位となる中、西欧諸国を歴訪した岩倉具視らによって日本古来の道德教育が見直され、さらに渋沢栄一らによって儒教を学ぶ斯文学会が設立された。そして、明治40(1907)年、湯島聖堂大成殿において、東京高等師範学校の校長であった嘉納治五郎が委員長となり、「孔子祭典」として釈奠が再興されたのである。

それに先立つ、明治37(1904)年6月16日、東京高等師範学校(筑波大学の前身校)は所蔵する釈奠器の一部を東京帝室博物館(東京国立博物館の前身)所蔵の文物と交換した。これは学校長の嘉納治五郎の発案により、湯島聖堂にて釈奠を催すために、所蔵品を交換したものと考えられる。この時の記録が、東京帝室博物館の日誌や『孔子祭典会会報』(資料24)に記される。なお、東京帝室博物館より譲り受けた品々は現存していない。おそらく、湯島聖堂もしくは東京高等師範学校に伝来し、関東大震災や空襲によって焼失したものと考えられる。

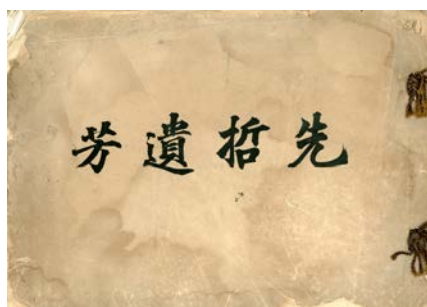
現在、釈奠は、その形式を変えつつ、湯島聖堂だけでなく、栃木・足利学校や岡山・閑谷学校、佐賀・多久聖廟などでもおこなわれ、我々に孔子が提唱した儒教の持つ道德を伝えてくれる。

24『孔子祭典会会報』1号

孔子祭典会編 東京：孔子祭典会 明治40(1907)年刊



釈奠を復興・運営した孔子祭典会は、明治39(1906)年に東京高等師範学校職員中有志の者が「孔子ノ我国ニ於ケル教化ヲ感謝スルノ意ヲ表センガ為ニ其ノ祭典ヲ大成殿(湯島聖堂)ニ於テ挙行センコトヲ企テ」創立された。本資料はその会報で、翌40年4月28日に開催された第1回孔子祭典の記録である。祭典開催にあたっては、^{せんあん ひあん}饌案・篋案を除き、東京帝室博物館(現 東京国立博物館)に収蔵される、かつての釈奠での礼器・祭器や、東京高等師範学校・女子高等師範学校の器具が使用された。ただし「歴聖大儒像」の記述はない。



(参考) 展覧会図録『先哲遺芳』

孔子祭典会編 東京：孔子祭典会 明治43(1910)年刊 個人蔵

第3回孔子祭典(明治42(1909)年)の折に、徳川時代先哲遺墨展覧会が催された。本資料は、その展示資料をまとめた図録。林羅山や貝原益軒といった日本の儒学者の肖像画や墨蹟が掲載される。

(参考) 絵葉書「明治四十年孔子祭典式場(男爵細川潤次郎君祝文捧読)」

孔子祭典会編 東京：孔子祭典会 明治41(1908)年刊 個人蔵



第2回孔子祭典記念品。第1回孔子祭典では、会員総代として祭主を務める細川潤次郎(十州)が祝文を奉読した。細川は土佐藩出身の法制学者で、開成学校権判事、工部省・司法省等官吏、元老院議員、貴族院議員・副議長、枢密顧問官、東宮大夫、また、女子高等師範学校(お茶の水女子大学の前身校)校長、学習院長心得、華族女学校校長等を歴任した。『古事類苑』の編纂総裁も務めた。東京高等師範学校教授^{なん まつなのり}南摩綱紀との共著『論語講義』もある。

嘉納治五郎と東京帝室博物館

明治37(1904)年6月16日、東京高等師範学校と東京帝室博物館は、釈奠器の交換をおこなった。それを示す公文書が現在、東京国立博物館に所蔵されており、当時の内情を知る上で、重要な史料である。今回、東京国立博物館のご厚意により、一部翻刻し、掲載する。

「高師 第三三七号」

本年四月二十八日付第四七六号ヲ以テ当校所蔵旧聖堂釈奠器ノ一部分ト貴館御所蔵全所属品ノ一部分ト交換ノ義御照会ノ趣了承即別紙目録ノ通及御引渡候条領収証御送付相成度此段及御回答候也

明治三十七年六月十日

東京高等師範学校長嘉納治五郎[㊤]

帝室博物館総長股野琢殿

「東京帝室博物館 卅七年六月十六日 第六五三号」

先般東京高等師範学校へ同校所蔵旧聖堂釈奠器ノ一部分ト本館所蔵全所属品ノ一部分ト交換ノ義御照会相成候処別紙之通回答及物品引渡有之候ニ付左按ヲ以テ領収証及別紙目録之通本館物品御引渡ニ相成可然哉此段相伺候也

案

先般本館所蔵旧聖堂釈奠器所属品一部分ト貴校御所蔵釈奠器ノ一部分ト交換之義及御照会置候処本月十日付第三三七号ヲ以テ簠以下式拾六點御引渡相成正二落手致候依テ別紙領収証及御送付候將又本館ヨリ交換トシテ御送付可致物品別紙目録之通及御回送候間御查收之上領「^(補入)収証」御差廻相成度候也

明治三十七年六月 日

帝室博物館総長股野琢

東京高等師範学校長嘉納治五郎殿

「高師 第三八九号」

領収証

(品目一覽略)

右正二領収候也

明治三十七年六月十六日

東京高等師範学校物品会計官吏 東京高等師範学校書記高田重治郎[㊤]

東京帝室博物館 御中

明治37年4月28日、東京高等師範学校(以下、高師)は、同校が所蔵する釈奠器を帝室博物館のものと交換することを決め交わした。高師は6月10日に目録を送り、16日には帝室博物館より領収証と目録が発行された。高師より送られた釈奠器は26点であり、全て現存し、その多くが『昌平志』の「器物誌」に掲載されている。また、『孔子祭典会会報』によると、嘉納治五郎が委員長となった「孔子祭典」では、帝室博物館より、これらの釈奠器を借用し、儀礼をおこなったらしい。この時、本学所蔵の宋儒6幅も掛けられた。また、参加者には、記念品として大成殿孔聖像写真版と孔聖画像が配付された。

なお、帝室博物館より送られた品は、以下のとおりである。「帳 錦裏萌黄絹(附属品共) 壹張」、「簾 拾六張」、「十哲神主 十牌、貳龕 壹組」、「花瓶 壹個」、「帳 紺萌黄緞子裏黄絹(附属品共) 壹張」、「帳 緞子黒葡萄(附属品共) 壹張」。これらの行方はわかっていない。

関連年表

和暦	西暦	出来事
寛永7	1630	林羅山、3代將軍徳川家光より忍岡に5352坪の土地と金200両を賜り、書庫と塾舎を建てる。
寛永9	1632	尾張藩主徳川義直の寄進により、上野忍岡に孔子廟(先聖殿・聖堂)創建。義直、孔子の聖像と四配の木像、祭器、扁額も寄付。 狩野山雪、羅山に依頼され「歴聖大儒像」を制作。
寛永10	1633	完成した孔子廟での初めての釈奠で「歴聖大儒像」のうち宋儒6幅が掛けられる。以降、釈奠では宋儒6幅が使用される。
寛永13	1636	12月 朝鮮通信使の金世謙、羅山の依頼により「歴聖大儒像」に着賛。
元禄元	1688	狩野益信により、賢儒図像(扁額)16枚が制作され、先聖殿の東西両廡に掲げられる(後、焼失)。 11月 5代將軍綱吉、孔子廟に参詣。以後、11月21日が廟参の日となり幕府の公式行事となる。
元禄3	1690	7月 綱吉、孔子廟の神田台(湯島)への移転を林鳳岡に命じる。 12月 綱吉、直筆の「大成殿」扁額を寄進する。
元禄4	1691	正月 湯島聖堂大成殿落成。「歴聖大儒像」が湯島聖堂大成殿に移される。 2月11日 移転後初の釈奠を挙る。
元禄16	1703	11月 地震による大火事が発生、大成殿・学舎などが焼失する。孔子像及び四配像・十哲の木主は救い出され、浅草駒形に移される。 12月 焼け残った書庫に一時安置された後、仮殿が建てられ、遷座。
宝永元	1704	11月 大成殿再建。 11月25日 孔子像及び四配像遷座。 狩野常信により賢儒図像扁額が制作される。
安永元	1772	2月 大成殿類焼。「歴聖大儒像」は孔子像などとともに焼失を免れる。
安永3	1774	大成殿再建。規模は縮小。
天明6	1786	1月 大成殿類焼。「歴聖大儒像」は孔子像などとともに焼失を免れる。
天明7	1787	大成殿再建。規模はより縮小。
寛政11	1799	大成殿、規模を拡大して再建。
寛政12	1800	大成殿再建後、初の釈奠を挙る。
明治元	1868	湯島聖堂、明治政府に接收。
明治4	1871	文部省に博物局設置。
明治5	1872	3月10日 湯島聖堂で文部省博物館として最初の博覧会を開催。同所に近代図書館としての書籍館が開館。以降、博物館は所管を変えつつ、帝国博物館、東京帝室博物館、国立博物館と名を変え、現在の東京国立博物館に至る。 9月 師範学校(筑波大学の前身校)、湯島の地に開校。翌6年に高等師範学校と改称。
明治6	1873	博物局・博物館・書籍館を博覧会事務局に統一。博物館は内山下町に移転。博物館の移転と共に湯島聖堂の孔子像、四子像、門額、祭器なども移される。
明治7	1874	書籍館、浅草文庫と改称。以降、いずれかの時点で「歴聖大儒像」に同文庫の蔵書印が捺される。
明治8	1875	3月 博覧会事務局が内務省の所管となり博物館(現在の東京国立博物館)と改称。 4月 文部省所管の博物館、東京博物館と改称し、大成殿を仮館とする。
明治9	1876	5月 修信使の金綺秀、湯島聖堂の左右の壁に掛けられた「歴聖大儒像」宋儒6幅を見る。 東京博物館、上野山内に移転。聖堂内に孔子像、四子像、諸額が再び設置される。
明治10	1877	文部省、東京博物館を教育博物館(後の国立科学博物館)と改称。
明治14	1881	浅草文庫、博物館(現在の東京国立博物館)に統合。「歴聖大儒像」も博物館で保管されたか。 教育博物館、東京教育博物館と改称し、新館を上野に建てる。
明治19	1886	博物館の書籍類の大部分が太政官文庫(後の内閣文庫)へ移される。書画類の一部は博物館に残され、「歴聖大儒像」も書画に含まれていたか。
明治22	1889	7月 東京教育博物館、高等師範学校の附属施設となり、湯島聖堂構内に移転(大正3〈1914〉年に分離し、文部省所管の独立施設となる)。
明治35	1902	高等師範学校、東京高等師範学校に改称。
明治36	1903	東京高等師範学校、大塚窪町に移転。これを機に、孔子祭典再興の話が持ち上がる。
明治37	1904	東京高等師範学校が所蔵する釈奠器を帝室博物館のものと交換。
明治39	1906	10月10日 孔子祭典再興を目指す同志が会合を開く。 11月28日 孔子祭典会の第1回発起人会を開催。
明治40	1907	4月28日 嘉納治五郎が委員長として第1回孔子祭典挙行。挙行にあたり、東京帝室博物館、東京高等師範学校、女子高等師範学校から「礼器祭器」や「器具」を借用する。記念品として大成殿孔聖像写真版と孔聖画像が配布され、嘉納治五郎による講演が行われる。以後毎年挙行される。
大正3	1914	10月 東京高等師範学校教授の中村久四郎、「歴聖大儒像」の解説を書く(「宋儒の六幅は東京高等師範学校にあり」と記され、この時点で「歴聖大儒像」は枝分かれしていたことがわかる)。後に宋儒6幅の箱の蓋裏に貼付される。
現在		「歴聖大儒像」のうち、宋儒6幅が筑波大学附属図書館の所蔵。伏羲から孔子および四配の15幅は東京国立博物館に所蔵される。

参考文献

単行本

- ・金華山人『鎮宅靈符神 感応秘密修法集』八幡書店 1912年
- ・京都史蹟会編『林羅山文集』弘文社 1930年
- ・京都史蹟会編『林羅山詩集』弘文社 1930年
- ・『帝室博物館蔵釋奠器図篇』帝室博物館 1935年
- ・徳川公継七十年祝賀記念會編『近世日本の儒学』岩波書店 1939年
- ・堀勇雄『林羅山』吉川弘文館 1964年
- ・土居次義『近世日本絵画の研究』美術出版社 1970年
- ・映像文化協会編『江戸時代の朝鮮通信使』毎日新聞社 1979年
- ・土居次義『日本の美術 172号 山楽と山雪』至文堂 1980年
- ・笠井昌昭・佐々木進・竹居明男訳注『訳注本朝画史』同朋舎出版 1985年
- ・荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会 1988年
- ・西垣晴次・小林一成校注『神道大系』神社編25上野・下野国 神道大系編纂会 1992年
- ・小松茂美編『続々日本絵巻大成』伝記・縁起篇8東照社縁起 中央公論社 1994年
- ・辛基秀・仲尾宏編『大系朝鮮通信使―善隣と友好の記録―』2巻 明石書店 1996年
- ・筑波大学附属図書館編『筑波大学和漢貴重図書目録』筑波大学附属図書館 1996年
- ・李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版 1997年
- ・鈴木健一『江戸詩歌の空間』森話社 1998年
- ・鈴木健一『林羅山年譜稿』ベリかん社 1999年
- ・杉原たく哉『中華図像遊覧』大修館書店 2000年
- ・須藤敏夫『近世日本釈奠の研究』思文閣出版 2001年
- ・生馬寛信・他編『幕末維新期漢学塾の研究』溪水社 2003年
- ・筑波大学日本美術史研究室編『平成15年度三菱財団研究助成 美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究 研究報告集』筑波大学日本美術史研究室 2005年
- ・仲尾宏『朝鮮通信使―江戸日本の誠信外交―』岩波書店 2007年
- ・佐藤権司『朝鮮通信使・琉球使節の日光参り―三使の日記から読む日光道中―』随想舎 2007年
- ・Julia K. Murray, Mirror of Morality: Chinese Narrative Illustration and Confucian Ideology, University of Hawaii Press, 2007
- ・守屋正彦・筑波大学日本美術史研究室編『「江戸前期儒教絵画に関する研究」報告書』筑波大学日本美術史研究室 2007年
- ・山澤学『日光東照宮の成立―近世日光山の「荘厳」と祭祀・組織―』思文閣出版 2009年
- ・生誕一五〇周年記念出版委員会編『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』筑波大学出版会 2011年
- ・筑波大学日本美術史研究室編『「東アジアにおける儒教美術の展開についての国際会議」報告書』筑波大学日本美術史研究室 2013年
- ・筑波大学日本美術史研究室編『日本の儒教美術』筑波大学日本美術史研究室 2014年
- ・筑波大学日本美術史研究室編『筑波大学附属図書館所蔵 狩野山雪筆《歴聖大儒像》調査報告論文集』筑波大学日本美術史研究室 2015年
- ・熊倉功夫『寛永文化の研究』（熊倉功夫著作集5巻）思文閣出版 2017年
- ・筑波大学日本美術史研究室編『儀礼空間の表象 釈奠―東アジアの孔子祭典を考える』筑波大学日本美術史研究室 2018年
- ・『斯文会財団創立百年記念 湯島聖堂と斯文会の軌跡』斯文会 2019年

- ・杉原たく哉『アジア図像探検』集広舎 2020年
- ・陳芳妹『孔廟文物與政治：東亞視野中的臺灣府學文物』台湾・臺大出版中心 2020年
- ・山下善也『狩野探幽・山雪―悉く新意を出し、狩野氏を一変す―』ミネルヴァ書房 2022年
- ・水野裕史編『儒教思想と絵画―東アジアの勸戒画』勉誠出版 2022年

論文

- ・中村久四郎「宋六子画像解説」『孔子祭典会会報』8号 1915年(初出は1914年)
- ・鈴鹿三七「京狩野家の古文書」『藝文』10巻11号 1919年
- ・土居次義「狩野山雪の歴聖大儒像」『茶道雑誌』27巻10号 1963年
- ・荒川浩和「近世時絵資料―釈奠器の時絵を中心として」『東京国立博物館紀要』9号 1974年
- ・大瀧晴子「日光と朝鮮通信使―寛永13年の通信使―」『朝鮮史叢』1号 1979年
- ・高木三男「歴聖大儒像(聖賢像軸)」『つくばね 筑波大学附属図書館報』9巻3号 1983年
- ・翠川文子「釈奠(一)―前期釈奠年表―」『川村短期大学研究紀要』10号 1990年
- ・翠川文子「釈奠(二)―孔子像―」『川村短期大学研究紀要』11号 1991年
- ・杉原たく哉「狩野山雪筆歴聖大儒像について」『美術史研究』30 1992年(『アジア図像探検』集広舎 2020年に再録)
- ・家永三郎「初期世俗画としての唐絵」『上代倭絵全史』改訂重版 名著刊行会 1998年(初出は1941年)
- ・鈴木健一「儒教と題画文学―林羅山の題画詩について―」『国文学 解釈と鑑賞』63巻8号 1998年
- ・守屋正彦「筑波大学が受け継いだ江戸幕府の「学」の象徴 狩野山雪筆「歴聖大儒像」について」『筑波フォーラム』55号 2000年
- ・篠塚富士男「筑波大学附属図書館 狩野山雪筆『歴聖大儒像』」『図書館雑誌』96巻5号 2002年
- ・土田健次郎「「治統」覚書―正統論・道統論との関係から―」『東洋の思想と宗教』23 2006年
- ・北野良枝「狩野山雪筆「歴聖大儒像」をめぐって」『アジア遊学』120号 2009年
- ・吾妻重二「朱熹の釈奠儀礼改革について―東アジアの視点へ」『東アジア文化交渉研究』4号 2011年
- ・藤田志朗「賢儒図像扁額の模写及び復元制作」『「東アジアにおける儒教美術の展開についての国際会議」報告書』筑波大学日本美術史研究室 2013年
- ・中根恭子「湯島聖堂の賢儒図像扁額の研究―筑波大学所蔵《賢儒図像扁額模本》を通しての考察」『日本の儒教美術』筑波大学日本美術史研究室 2014年
- ・蕭宇恒「從《道統十三贊》到《静聴松風》政治宣伝―南宋理宗の以画伝意」『藝述論壇』第九期 2015年
- ・黄瓊儀「以道統為圖―談院藏道統五像與帝王道統萬年圖」『故宮文物月刊』388 2015年
- ・鈴木信昭「朝鮮仁祖代金世濂が見たマテオ・リッチの世界図」高橋継男教授古稀記念東洋大学東洋史論集編集委員会編『高橋継男教授古稀記念東洋大学東洋史論集』東洋大学文学部史学科東洋史研究室 2016年

- ・吳誦芬「萬世師表—書畫中的孔子特展」『故宮文物月刊』412 2017年
- ・陳芳妹「『萬世師表』御書在國立故宮博物院展出」『故宮文物月刊』412 2017年
- ・柳原一興「日光を詣でた朝鮮通信使」『天地人—宇都宮商工会議所会報—』3月号 2018年
- ・森新之介「江戸時代における道統と華夷、神儒—神代上古の叙述に着目して—」『日本儒教学会報』2号 2018年
- ・杜正勝「關於孔子之真實與想像的探討」『儀礼空間の表象積奠—東アジアの孔子祭典を考える』筑波大学日本美術史研究室 2018年
- ・陳芳妹「湯島聖堂の選擇以日臺十八世紀釋奠器的比較為中心」『儀礼空間の表象積奠—東アジアの孔子祭典を考える』筑波大学日本美術史研究室 2018年
- ・James McMullen「Emperor and Uncrowned King; the Imperial Palace Sekiten of the Mid- and Late-Tokugawa Period」『儀礼空間の表象積奠—東アジアの孔子祭典を考える』筑波大学日本美術史研究室 2018年
- ・關信子「日本人にとっての孔子像—仏教儀礼における釈迦像との比較—」『儀礼空間の表象積奠—東アジアの孔子祭典を考える』筑波大学日本美術史研究室 2018年
- ・守屋正彦「礼拝空間における孔子像と積奠について」『儀礼空間の表象積奠—東アジアの孔子祭典を考える』筑波大学日本美術史研究室 2018年

展覧会図録
 ・斯文会編『江戸は日本人を創った湯島聖堂三〇〇年記念展 湯島聖堂と江戸時代』斯文会 1990年
 ・『特別陳列 湯島聖堂伝来 釈奠器』東京国立博物館 1991年
 ・筑波大学附属図書館編『筑波大学附属図書館所蔵日本美術の名品—石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風と歴聖大儒像—』筑波大学附属図書館 2000年
 ・『徳川義直と文化サロン—尾張家初代義直生誕四〇〇年』徳川美術館 2000年
 ・史跡足利学校事務所・足利市立美術館編『足利学校—日本最古の学校 学びの心とその流れ』足利教育委員会・足利市みどり文化・スポーツ財団 2004年
 ・筑波大学日本美術史研究室・附属図書館編『江戸前期の湯島聖堂—筑波大学資料による復元研究成果の公開』筑波大学附属図書館・芸術専門学群 2005年
 ・徳川記念財団編『徳川将軍家の学問—紅葉山文庫と昌平坂学問所—』徳川記念財団 2006年
 ・筑波大学・斯文会制作著作『孔子祭復活百周年記念事業 草創期の湯島聖堂 よみがえる江戸の「学習」空間』清流出版社 2007年
 ・京都国立博物館・毎日新聞社編『狩野山楽・山雪』毎日新聞社 2013年
 ・守屋正彦編『よみがえる湯島聖堂本尊孔子像彩色復元特別展—聖堂ゆかりの狩野派の絵画』筑波大学 2015年
 ・『萬世師表—書畫中的孔子』台湾・國立故宮博物院 2017年

掲載資料

資料番号	資 料 名	請求記号
1	歴聖大儒像(孔子像)	東京国立博物館所蔵
2	歴聖大儒像(顔子像)	東京国立博物館所蔵
3	歴聖大儒像(曾子像)	東京国立博物館所蔵
4	歴聖大儒像(子思像)	東京国立博物館所蔵
5	歴聖大儒像(孟子像)	東京国立博物館所蔵
6	歴聖大儒像(周子像)	721.4-Ka58/ 貴
7	歴聖大儒像(程伯子像)	721.4-Ka58/ 貴
8	歴聖大儒像(程叔子像)	721.4-Ka58/ 貴
9	歴聖大儒像(張子像)	721.4-Ka58/ 貴
10	歴聖大儒像(邵子像)	721.4-Ka58/ 貴
11	歴聖大儒像(朱子像)	721.4-Ka58/ 貴
12	雲龍蒔絵尊案	東京国立博物館所蔵
13	海藻蒔絵俎	東京国立博物館所蔵
14	闕里誌 巻1	ネ359-5
15	聖堂之画図	121.53-H76
16	賢儒図像扁額模本 右ノ1	力210-192
17	三才図絵 人物4巻	イ290-48
18	聖賢像賛 巻4	タ740-7
19	宋史紀事本末論正 巻80	222.053-F51-22
20	晦庵先生朱文公文集 巻86	イ350-94
21	鷲峰先生林学士文集 巻86	ル295-13 / 貴
22	羅山林先生文集 巻64	ル295-7
23	本朝画史 巻4・5	力200-69
24	孔子祭典会会報 1号	イ520-17

※附属図書館の貴重図書は、請求記号の末尾に「 / 貴」と示した

協力者

資料・写真提供

東京国立博物館 (Image:TNM Image Archives)
国立国会図書館
根津美術館
園城寺
日光東照宮
公益財団法人斯文会
台湾・国立故宮博物院
韓国・国立中央図書館

修復関係

株式会社修護
公益財団法人朝日新聞文化財団
公益財団法人出光文化福祉財団
公益財団法人住友財団

デザイン原案

浜野 那緒 (芸術学学位プログラム大学院生)

シンポジウム

池田 和彦 (株式会社修護代表取締役)
武田 祐樹 (東京大学特任研究員)
塚本 鷹充 (東京大学教授)
程 永超 (東北大学准教授)
山下 善也 (神戸大学講師)
林 聖智 (台湾・中央研究院研究員)

展示協力

沖松 健次郎 (東京国立博物館)

企画

筑波大学芸術系

野中 勝利 (系長)
水野 裕史 (助教)

筑波大学附属図書館

池田 潤 (館長)
島田 康行 (副館長・研究開発室長)
熊淵 智行 (学術情報部長)

筑波大学附属図書館研究開発室

谷口 孝介 (人文社会系教授)
山澤 学 (人文社会系准教授)
水野 裕史 (芸術系助教)

附属図書館特別展ワーキング・グループ

真中 孝行 (主査)
浅野 ゆう子
石津 朋之
大久保 明美
高島 恵美子
西 彩花
藤田 祥子
森島 葉月
吉川 千春

電子展示Web

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/2022/>

関連企画

特別講演会 (11/2)
狩野山雪「歴聖大儒像」の伝来と魅力
シンポジウム (11/5)
徹底解剖! 狩野山雪「歴聖大儒像」

令和4年度 筑波大学附属図書館特別展

孔子をまつる ―歴聖大儒像の世界―

令和4年11月1日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2022

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社

ISBN 978-4-910114-39-2

